

# いしづち

2023.11

NOVEMBER

No.155

 公益社団法人 愛媛県建築士会  
Ehime Society of Architects & Building Engineers  
<http://www.ehime-shikai.com>



くつぬぎの間  
道後温泉の浴槽の深さについて (前編)  
世界建築紀行 「アルルの跳ね橋」とル・コルビュジエの「輝く都市」ユニテ・ダビタシオン

1	くつぬぎの間	道上壯/VuA……①
2	道後温泉の浴槽の深さについて（前編）	一級建築士 野本 健……③ 文化財・まちづくり委員会 委員 花岡 直樹……③
3	世界建築紀行 “アルルの跳ね橋” とル・コルビュジエの「輝く都市」ユニテ・ダピタシオン	西予支部 松山 清……⑦
4	寄稿 第2回 ヘリテージ建築を語る（建築市民講座に参加して）	松山支部 中尾 忍……⑩
5	委員会活動報告 開かれた登録有形文化財建物 まちの縁側「ミュゼ灘屋」	文化財・まちづくり委員会 委員 中山百合子……⑫
	文化財・まちづくり委員会 防災イベント	文化財・まちづくり委員会 防災部会長 西浦 郁子……⑬
	防災イベントに参加して	文化財・まちづくり委員会 委員 大西 千里……⑭
	第32回全国女性建築士連絡協議会 in 金沢	「守り・育て・受け継がれる技術、手仕事」～伝統工芸と建築～ 企画から開催まで
	女性委員会 委員長 下元 美恵……⑮	松山支部 永井 由起……⑮
	宇和島支部 田中 陽子……⑯	
	異業種勉強会 ～みんなで防災グッズをつくろう～ 企画から開催まで	女性委員会 副委員長 入船 安紀……⑰
	女性委員会 委員 岩本さやか……⑰	
	一級建築士設計製図試験対策勉強会	青年委員会 委員長 和田 崇……⑱
6	支部報告 建築士の日の行事 ～いまばり建築巡礼2023～	今治支部 越智 弥生……⑲
	松山支部研修旅行 研修バスツアーin丸亀	松山支部長 花岡 直樹……⑳
		松山支部 松平 定真……㉑
		松山支部 生熊 有子……㉑
	建築士の日の行事 宇和町お庄屋 長屋門 見学会	西予支部長 井関 克徳……㉒
	建築士の日の行事 目指せ建築士！安全な橋をつくろう。	宇和島支部 青年部 中尾 英治……㉓
7	けんちくの輪 日常	松山支部 東 哲也……㉔
	見える錯覚 見えない錯覚	八幡浜支部 杉山 博司……㉕
8	お知らせ 令和5年度第3回理事会（支部長合同会議）概要報告	事務局……㉖

※尚、表紙及び本誌記事の無断転載を禁じます。



### アクリル、キャンパス

#### 題：「国登録 木屋旅館」

木屋旅館は、饅頭屋の木屋徳右衛門の息子、徳三郎が明治44年開業。第29代内閣総理大臣・犬養毅などの偉人も宿泊した明治時代の旅館の面影が残る登録有形文化財。

当時の宇和島は、明治以後急速な産業、文化の発展に伴い、追手通りや袋町を中心に繁華街が形成され、「融通座」という芝居小屋が追手通りにあり、商業客はもとより役者や歌手などの芸人も多く宿泊した。

この旅館は木造二階建て、切妻造平入り、棧掛け瓦葺き、延べ面積559平方メートル(169坪)の、つし造りである。正面から見る外観は、1階は連子格子窓と犬矢来と、2階は硝子窓が連なり、風情のある佇まいを醸しだしている。

1995年に惜しまれつつ廃業したが、2012年に新しい滞在型の観光名所として再生オープンした。

（資料/宇和島市ホームページより）

#### 表紙作者 上田 勇一 プロフィール

- 1974 東京生まれ
  - 1980 小学校から高校まで松山在住
  - 1990 東日本建築教育研究会製図コンクールにて奨励賞
  - 1991 愛媛県内高校生建築競技設計にて会長賞  
（愛媛県建築士事務所協会主催）
  - 1993 画家・高橋勉氏に師事。約10年間、古典絵画技法全般を学ぶ
  - 1996 日本工業大学建築学科 卒業
  - 1998 画家として活動開始する。東京や埼玉にて毎年個展開催
  - 2002 日本ファンタジーノベル賞受賞作者「世界の果の庭」  
（新潮社）の装丁担当
  - 2003 美術家の登竜門である昭和会にて優秀賞（東京/日動画廊）
  - 2010 愛媛県美術館に作品「ドライブフラワー」收藏される
  - 2015～17 愛媛新聞 冊子アクリート表紙画連載  
絵画教室やオリジナルブランド額工房「糊リチエルカ」を設立
  - 2017 「えひめの塗り絵」を出版
- その他、出版装丁画や受賞多数、全国にて個展中心に活動。  
現在、現代日本美術会 会員/審査員

日本の住宅には、海外の住宅にはない独特の空間がある。それは「玄関」だ。朝に夕に、靴を履き靴を脱ぐ。「行ってきます」と出かける挨拶をし「ただいま」と帰ってきた挨拶をする。傘を取り、傘を置く。鍵をかけ鍵を開ける。何気ない日常の行為だが、気持ちを切り替える結節点の場所でもあるのだ。



Sl.House\_玄関

気持ちを切り替える一番のスイッチは、靴の脱ぎ履きだ。この行為が、海外のエントランスにはない日本独特の玄関を生み出している。

靴を履くということは、今から外に行くということだ。つまり、社会や他者や異者と、関わり交わり戦うということだ。緊張や不安や恐れと向き合い、多勢に無勢の中に身を置くことを意味する。

逆に、靴を脱ぐということは、やっと内に帰ってきたということだ。つまり、家族や身内や自分と、触れ合い癒し合い見つめ合うということだ。安らぎや安心や安堵に包まれて、ゆりかごの中に身を置くことを意味する。

海外では、ベッドで寝る時まで靴を履いている所が多い。ヨーロッパ文化の影響が強いところほど、その傾向にある。ヨーロッパでは、長きに渡り国と国との争いが絶えなかった。いつ何時、隣国が異邦人が襲ってくるのか分からない。

敵の来襲があれば、寝ていても飛び起きて、靴を履き武器を取り、戦うしかなかった。靴は、国を民を自分を守る上で、真っ先に身に着けなければならぬものだった。だからこそ、寝ている時以外は身に着ける。靴履き文化には、この様な負の歴史の背景があるのではないかと僕は思っている。



HK.House\_玄関

日本でも、戦国時代終焉までは戦乱の世が続いた。ただ、ヨーロッパのように国同士の争いではなく、大名同士の争いであり、国民を巻き込んでの戦いではなく、武士を中心とした戦いで、その裾野は広くはなかった。さらに、高温多湿モンスーン気候の日本では、履物は汚れやすかった。寢床まで履物を履き続けるには不向きな気候も相まって、日本では逆に、くつぬぎが段々と浸透していった。くつぬぎ文化には、気候と共に自然と共に、共生の思想が色濃く反映しているのではないかと僕は思っている。

日本の玄関は、海外の玄関とは違ったバッファゾーンだ。相反した2つの空間を結びつける中間領域であり、異なる2つの空間を切り替える緩衝空間でもある。内でもあり外でもあり、プライベートでもありパブリックでもあり、家でもあり社会でもある。

出掛ける時を考えてみよう。廊下にいる時は、まだ靴を履いていないので、気持ちは内モードだ。玄関の土間に立って靴を履いた時は、足元は外モードだが、まだ家の中なので頭は内モードだ。頭から足元へ向けて、内から外への2つの空間への気持ちが、徐々に移り変わっている不思議な状態となる。扉を開けて外に出て、玄関の鍵をかけた瞬間、足の先から頭のとっぺんまで外モードになる。

帰ってきた時を考えてみよう。玄関の鍵を開けるまでは外モードだ。扉を開けて中に入り、玄関の土間に立っている時は靴を履いているので、足元は外モード

だが、すでに家の中なので頭は内モードだ。足元から頭へ向けて、外から内への2つの空間への気持ちが、徐々に移り変わっている不思議な状態となる。靴を脱いで廊下に入り、上足になった瞬間、頭のてっぺんから足の先まで内モードになる。

僕たち日本人は、玄関での靴の脱ぎ履きを通して、無意識の内に気持ちの切り替えを行いながら、日々、内と外、プライベートとパブリック、家と社会を切り結んでいる。旅館で、靴を脱いで部屋に上がってくつろぐ時、家と似た感覚がある。ホテルで、靴を履いたまま部屋に入ってくつろぐ時、家とは違った感覚がある。靴を脱いでスリッパに履き替えても、その違和感が残ったままだ。単に靴の脱ぎ履きだけではなく、土間と床の段差やそこで行われる儀式的な行為。上足と下足での足裏の感覚の変化や床に座ったり寝っ転がったりできる開放感を通して、僕たちは気持ちの切り替えを行っているとも言えるのだ。

上り框、式台、靴脱ぎ石。これらは、これまでの日本の建築文化が生み出してきた、玄関やくつぬぎに対する一つの答えだ。僕たちは、ここから進化発展していかなければならない。バリアフリー、ユニバーサルデザイン、メタバース、AI、空飛ぶ車……、建築はどんどん変わり、それに呼応して玄関もどんどん変わるだろう。



TI.House\_玄関



YM.House\_玄関

さあこれからは、今までよりも一歩踏み込んで玄関について考えよう。図面を描くとか、デザインをするとかだけではなく、建築心理学的にどのような空間であるべきなのかを追い求めてみよう。日本人にとって、クライアントにとって、訪ねてくる誰かにとって、玄関はどうあるべきなのか？ どのような空間だと、僕たちの気持ちの切り替えはスムーズに移り変わるのか？ そして、無意識の内にいつの間にか切り替わるのが良いのか？ 何かをきっかけに劇的に変化するのが良いのか？ などなど、考えなければならないことを上げれば本当に切りがない。

ここまでこのコラムを読んでもくれたことに感謝したい。建築の主役からは程遠い玄関の話を、こんなにも読んでもらったからだ。ここまで妙なことを考えてしまう僕は、さながら妄想家に違いない。でも、この妄想がひょっとしたら新しい建築に繋がるかもしれない。日本の「くつぬぎの間」にはそんな可能性があると思っている。もちろん、他の空間にも同じ様な可能性があることは言うまでもない。

「Think different. (違ったことを考えよう。)」今は亡きスティーブ・ジョブズの言葉が、建築を考える僕の原動力でもある。

# 道後温泉の浴槽の深さについて

執筆： 一級建築士 野本 健  
監修：文化財・まちづくり委員会 委員 花岡 直樹

前編



▲神の湯本館 一ノ湯



▲神の湯本館 二ノ湯



▲神の湯本館 三ノ湯

## 謝辞

梅津 秀基様【文化財建造物保存技術協会】～資料の考察及び助言  
廣見 秀行様【文化財建造物保存技術協会】～資料の提供及び助言  
増田 奏様【住まいの解剖図鑑】～寸法のロマンについて

## <おことわり>

以下記載内容は、現時点において収集できた文献から総合的に判断した内容を記載している。  
そのため、調査状況により新たな知見が得られた場合、記載内容に訂正の必要が生じる可能性はある。

## はじまり

道後温泉本館には営業している浴室として「神の湯浴室」、「霊の湯浴室」が存在する。多くの観光客は「神の湯浴室」に入浴されるが、この「神の湯浴室」は浴槽が深いことで有名である。浴槽に身を沈めるとほぼ顔までくるお湯の高さに多くの人は一様に驚く。そのため、入浴の際は少し腰を上げたり、足を使ったり等、水面から顔を出す工夫が必要となってくる。

絵葉書等の写真において、温泉に入っている人々は、みな一様に肩から上が出ている写真となっているため、通常の浴槽の深さであると錯覚を起してしまう。しかし、実際の浴槽の深さは深いため、肩から上が出るように少し腰を浮かせて写真撮影をしているのが現実である。

過去の資料や伝聞においても、お湯が深いことに対する話が数多く残っている。例えば、親は子どもたちに泳ぎ方を教える練習の場として活用したり、子どもは浴槽が深く溺れてしまう恐れがあるため、湯口付近に行きたがらなかったなどの話がある。

なぜこのように道後温泉本館の浴槽は深いのか、その理由を説明できる人間はこの世に存在しない。噂話として道後温泉には多くの観光客が訪れることにより、立って入浴できるようにするため、という話もあるが過去より地元の人々に愛された温泉施設が立位浴とはいささか不思議な話でもある。

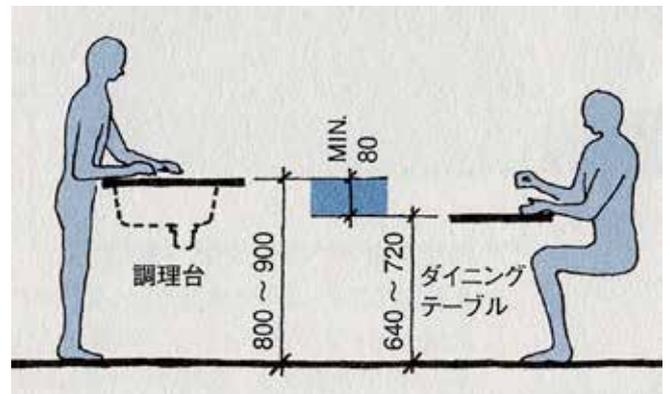
今回は多くの過去の記録や現在の保存修理工事の記録が収集できたことにより、この謎を解き明かそうと考えた次第である。

## 寸法のロマンについて

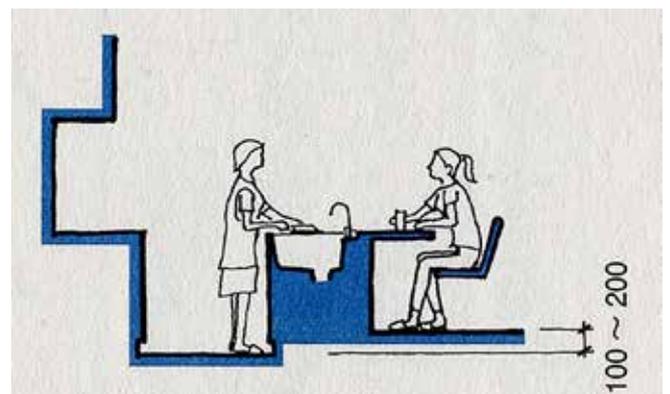
浴槽の深さは一般的に500mmの深さである。寸法は建築設計におけるロマンの一つであり、人が心地よいと感じる寸法は人それぞれであるが、一定の基準がないと設計できないのが現実である。

みなさんが公園で目にする屋外のベンチの座面の高さは400mm程度で、座面の高さは身長 $\frac{1}{4}$ が適正な椅子の高さと言われていることから、身長が1600mmの人間を想定していることになる。

現代の男女の身長 $\frac{1}{4}$ の平均値は1652mmであり、 $1652 \div 4 = 413$ mmであることからあながち的外れな数値ではないことが考えられる。

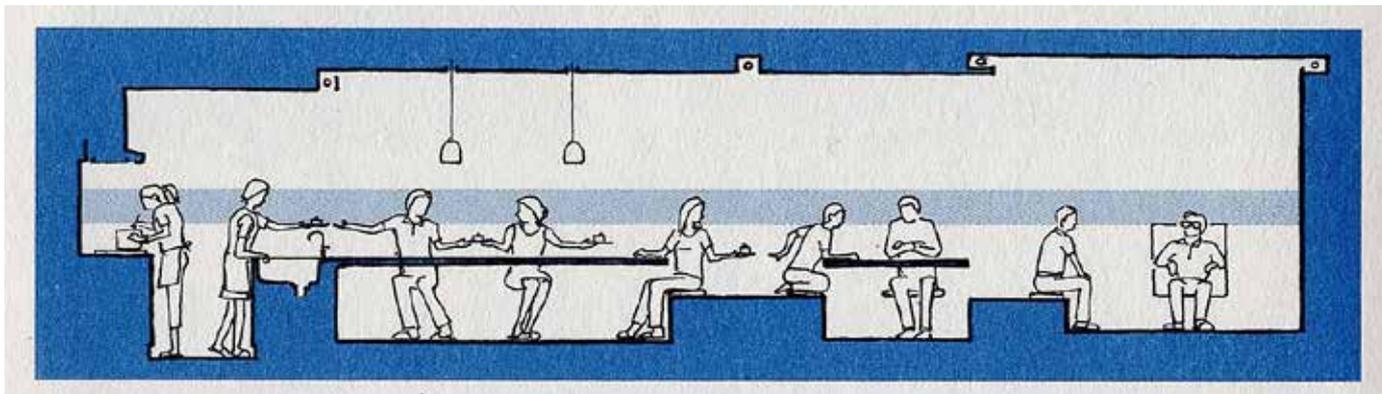


▲ 図①



▲ 図②

# 道後温泉の浴槽の深さについて



▲ 図③

住宅においてもキッチンとダイニングの関係性において、通常の高さで設計を考えると目線の高さが合わず、どこかぎこちなさを感じてしまう。

しかし、キッチンの床面の高さを少し低くすると目線の高さがあい、コミュニケーションの取れやすい雰囲気を作り出すことができる。

このように一連の目線の高さに配慮したキッチン、ダイニング、リビング間の視線の高さを考慮した設計、寸法計画を立てられることが建築士として一人前と言われている。

(図①～図③：引用 住まいの解剖図鑑)

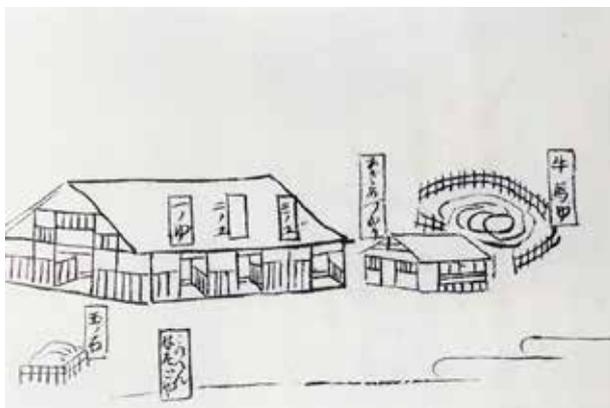
## 各時代における浴槽の深さと人間の身長について

過去の文献や実測調査で取得できる浴槽の深さが検討できる浴室は下記となる。

年代	当時の浴室
寛永15年(1638)	一ノ湯、二ノ湯、三ノ湯
明治27年(1894)	一ノ湯
大正13年(1924)	養生湯
昭和10年(1935)	神の湯東西浴室
昭和15年(1940)	霊の湯浴室
昭和29年(1954)	神の湯女子浴室

上記のリストの年代に近い男女の平均身長を「日本人のからだ 健康・身体データ集」から引用し、また、座面から肩の高さを割り出す比率に関して

は「AIST 人体寸法データベース1991-92解説書」から引用し、当時の人体寸法と浴槽の深さの相関関係を比較することで当時の浴槽の深さをどのように考えていたか検討していく。



▲ 道後温泉絵図 (寛永15年)

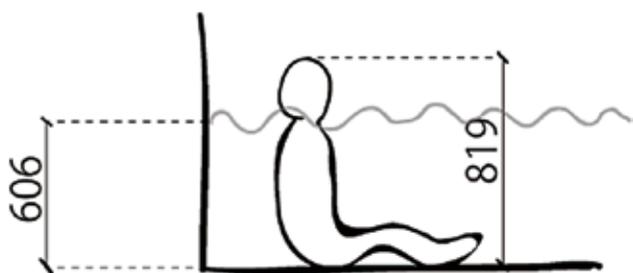
## 一ノ湯、二ノ湯、三ノ湯：寛永15年（1638）



▲湯釜薬師

当時の松山藩藩主である松平定行が道後温泉の施設の充実を図るため、寛永15年（1638）に改築工事を行った。「伊予志料」の中に「湯の溜まった深さは2尺であった」という記述がある。当時のお湯を出す一ノ湯の湯釜は現在、道後公園に鎮座している湯釜薬師であった。

2尺は606mmであり、当時の男女の座面から肩までの寸法を考えると肩の少し上を狙ったお湯の深さの寸法であることが読み取れる。



### 江戸時代（前期）

性別	身長	座面から肩まで
男	1550	604
女	1430	557

（単位：mm）

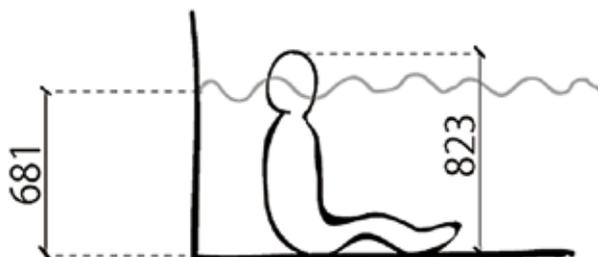
## 一ノ湯：明治27年（1894）

明治27年（1894）に伊佐庭如矢町長は城大工の子孫である坂本又八郎と共に3層楼の「神の湯本館」を建設した。昭和10年（1935）に改築する際に、一ノ湯の湯溜まりの寸法が記載されており、2.25尺であった。

2.25尺は681mmである。寛永15年（1638）より約80mmお湯の深さが増えており、少し顔まで湯につかる深さとなったことが読み取れる。



▲一ノ湯



### 明治時代

性別	身長	座面から肩まで
男	1547	603
女	1448	564

（単位：mm）

（後編に続く）

# “アルルの跳ね橋”とル・コルビュジエの「輝く都市」 ユニテ・ダビタシオン

西予支部 松山 清

## 1 南フランスへの小旅



▲ヴァン・ゴッホ橋（アルルの跳ね橋）

マルセイユにあるユニテ・ダビタシオンまではパリから遠いこともあり、南仏プロヴァンス地方へ行くのならこの際アルルへも立ち寄りたかった。ゴッホの“跳ね橋”の絵を見た時から、「アルルにはこんな景色があるのかあ」とずっと思ってきたので、アルル訪問は夢の一つだった。実現可能とは考えてなかったのですが、今回の機会を逃したら一生訪ねることは難しいので、マルセイユへ行く前にアルルを散策することにした。

アルルはマルセイユの西約70kmと近く、ゴッホが暮らし、歴史に名を刻む数々の傑作を描いた町を訪ねることは私にとって貴重な体験だ。パリから日帰りは無理そうなのでTGVでの1泊2日の南仏への小旅行となった。朝早くパリを出発すると昼前にアルルへ着く列車があることを発見、乗り換えなしで行けることもわかった。プロヴァンス地方は魚料理も有名で、地中海が本場のブイヤベースにも期待が膨らみ、考えるだけでワクワクするような計画となった。



▲マルセイユのユニテ・ダビタシオン



▲円形闘技場外観



▲内部

## 2 アルル散策

アルルの街のことは全く知らなかったのので、ゴッホがこの町で描いた「夜のカフェテラス」や「黄色い家」の風景はどこにあるのか、などマップと睨めっこ。アルル駅にはタクシーもいなくて、バスの便もわからない。それにアルル駅は町の中心部からやや離れた所にある。マルセイユへ行く途中に立ち寄って大丈夫なの？ 観光はできるの？ など疑問が次々に沸いてくる。目標は「夜のカフェテラス」が描かれたお店でコーヒーを飲む、というくらいにした。アルルはローマ帝国時代に繁栄して円形闘技場などの世界遺産もたくさんあり、魅力的な町だった。ビゼー作曲の“アルルの女”という楽曲からは、情熱的な街と人の生き方を感じるが、その時代は躍動感溢れるトキメク町だったのだろう。

2023年1月30日午前7時9分パリ・リヨン駅発のTGVでアルルへ向かった。この便は朝早い指定された席に座ってさえいれば約4時間後にはアルル駅に降り立てる。出発が早いので駅の売店で朝食のサンドイッチとジュースを購入し、TGVの2階席に乗り込んだ。大きなスーツケースはホテルに預け、コンパクトなキャリーケースだけを持って1泊2日の小旅に出発。翌日の夜には再びリヨン駅のステーションホテルに帰ってくる計画だ。



▲「黄色い家」があった辺り

アルルはそれ程大きな街ではなく、1日散策すればかなりの範囲は回れる。ぼやっと考えていたアルルのイメージとは違って、歴史と情熱、そしてゴッホが求めていた南



▲レビュブリック広場

仏の陽光の暖かさを  
感じる街に触れるこ  
とが出来そうだ。ゴッホが見た憧憬に近づけるかも  
しれない。

アルル駅は松山駅くらいののんびりとした駅で、  
駅前広場にサービスステーションがあった。そこに  
荷物を預け、リュックサックを背負って旧市街へと  
歩き始めた。

ローヌ川が駅前広場のすぐ前を流れていて、展望  
台のような橋脚跡に上がってみると、この辺りで川  
は右に湾曲していく。ちょうどこの場所はゴッホが  
「アルルの星月夜」という作品を描いた場所だった。  
その絵は夜景で星がたくさん描かれているのだが、  
目を閉じると瞼の裏に絵が浮かんでくる。その先の  
ラマルティエヌ広場にはゴッホが住んだ「黄色い家」  
があったし、その家の絵はゴッホの代表作の一つだ。  
ゴーギャンと暮らしたその家があった所には現在4  
階建てのアパートが建っていたが、背景の鉄道橋は  
当時の面影を残していた。この黄色い家は空襲で焼  
けたらしい。当時ゴッホはこの家にゴーギャンを迎  
え入れ、ゴーギャンの部屋をひまわりの絵で飾るた  
めに、7点の「ひまわり」をここで描いたのだ。

ラマルティエヌ広場からカヴァルリ門を抜けて、  
旧市街の城壁の内部へ入る。中心部へ向かうと“ア  
ルルの女”の出会いの場としても登場する円形闘技  
場が目の前に現れた。ローマ時代には決闘が行われ  
ていたが、現在は闘牛や競技、イベントに使われ大  
切に保存されていた。

円形闘技場から西へ狭い路地のような道を下って  
いくと中心部にあるレビュブリック広場へ出た。広場  
を取り囲むように市庁舎や世界遺産サン・トロフィ  
ム教会があり、古代フォローム地下回廊へも市庁舎  
から入って見学した。その後、通称カフェ・ヴァ  
ン・ゴッホがあるフォローム広場へ行ったが、シー



▲エスパス・ヴァン・ゴッホ

ズンオフのため閑散として  
人影は疎ら。お店も休業中  
でコーヒーを飲むことはで  
きななかったが、「夜のカフェ  
テラス」の説



▲カフェ・ヴァン・ゴッホ



▲「落ち葉」に描かれた墓地の石棺

明看板がお店  
の前にあって、  
絵の描かれた  
時の雰囲気  
に浸るには十分  
で、胸が一杯  
になった。そ  
の後、「アルル  
の病院の庭」

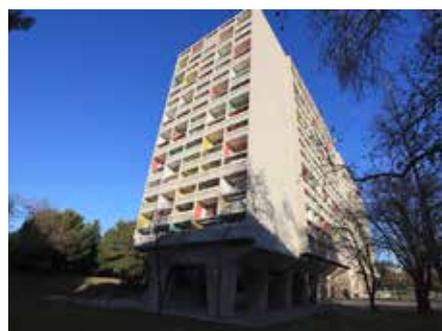
が描かれた現エスパス・ヴァン・ゴッホや古代劇場、  
ファン・ゴッホ橋など巡り歩いた。

ヴァン・ゴッホ橋は橋の番人の名をとって、ラン  
グロワの橋とも呼ばれていて、実際にゴッホが「ア  
ルルの跳ね橋」としてここを描いたものではない。  
元の跳ね橋があったところから移築され、ここに架  
けられているのだが、絵のモデルの実際の場所とは  
違う、とはいえ、絵の情景にとてもよく似ていた。  
現在は、ここにヴァン・ゴッホ橋として跳ね橋があ  
るため、観光客はアルルの中心部からかなり離れて  
いるのに、この橋を見るために訪れる。

アルル中心部を歩いていると、この街の建物の壁  
の多くは黄色なのだと気づいた。全部というのはい  
い過ぎかも知れないが、このような色合いをしてい  
るため、ゴッホの黄色い家が誕生したのだと確信！  
ゴッホが勝手に家の外壁の色を黄色で表現したのか  
と想像していたが、実際の家の壁もかなり黄色い色で、  
これを独特のインスピレーションで捉え表現したの  
がゴッホ作品の特徴の一つだろう。

最後に訪れたアリスカン墓地ではゴッホの「落ち  
葉」という案内板を発見！この「落ち葉」(アリスカ  
ン)は、ここがモデルだったのだ、と知り感激。絵  
はよく知っていたが、そのモチーフが墓地だったと  
は…。街の中を慌ただしく行き交う人々なのか、とい  
う印象を持っていたが、この寂しい墓地の落ち葉が  
描かれていたのだ。絵ではベンチのように見えてい  
たが、落ち葉の絨毯に一面を染められた中に並ぶ石  
棺だった。

3月に新宿のSOMPO美術館へ行った際に、ゴー  
ギャンの“アリスカンの並木道、アルル”と出合っ  
た。1888年の作品。ゴッホと一緒にアリスカンを  
描いていたのだ。今から135年程前に二人はここで



▲ユニテ・ダビタシオン (西面)

絵を描いたん  
だ。そんなこ  
とを改めて考  
え、ゴッホの  
”落ち葉”も、さ  
らに自分には  
印象深い作品  
に思えてきた。



### 3 マルセイユのユニテ・ダビタシオン

#### 3.1 ホテル・ル・コルビュジエ



▲玄関アプローチ

1952年完成のユニテ・ダビタシオンは全5棟のうち、1棟目に完成した。サッカーのオリンピック・マルセイユの本拠地スタッド・ヴェロドームの近くにあるが、マルセイユ中央駅からは遠いので公共交通機関で行くのが難しく、安全面も考慮して駅からタクシーで行った。3、4階には“ホテル・ル・コルビュジエ”があり、1万円台前半で宿泊できた。ここ最近の旅行で唯一ホッとした料金だった。



▲ホテルの中廊下



▲入口のモデュロール

ユニテ・ダビタシオンは都市なので、ホテルや保育所、プール、郵便局、スーパーなど色々なものが一つの建物の中にあるが、コルビュジエは豪華客船で旅した時に建物の中に様々な機能を持たすことの発想を得たらしい。

玄関は、ホテルの宿泊客も住民も同じ出入り口だった。入ったところに守衛室があり「ホテルか？」と声を掛けられ、フロントは3階と教えられた。フロントと言ってもレストランとホテルの受付を兼ねていて、女性が一人事務机に腰掛けているような簡単な雰囲気、少しの説明とクレジットカードの確認をした後、コルビュジエデザインの鍵を持って部屋に



▲狭小のシングルルーム



▲扉のないシャワールーム



▲屋上の排気筒とホール

案内された。部屋数も少ないのでこれで良いのだろう。中廊下式で内部はやや暗い印象だが、赤・黄・青・緑の原色を

扉に配色し多用することで解決していた。

D号室の鍵を開けて扉を入るとさらに二つの扉があって、右の鍵を開けたところが今宵の宿のシングルルームだった。機能的でシンプルな細長い作りで、ドアにはコルビュジエのモデュロールが描かれていた。モデュロール寸法によって天井高2260mm、間口3800mmのため、部屋の幅は半分の1900mm。ベッドと狭い通路で一杯となる。簡素な備え付けの家具もいくつかあり、何もかも余計なものが省略されていた。シャワールームの扉までもない。当然、水しぶきなどは洗面室に飛び散るが、それでも不要というのか。石けん置きもなく床に置いてある。トイレもペーパーホルダーがなくて、横っちょにトイレレットペーパーが置かれているのみだが、扉はあった。

#### 3.2 ユニテ散策

1月31日ユニテ・ダビタシオンで爽やかな朝を迎える。起床は午前6時。メゾネットを実感する朝食のレストランは、午前7時半というのに自分が一番乗りで、そのうち数名がやってきた。のんびりとした時間が流れる。コンチネンタルブレックファストで朝食までもシンプル。それでも全く不満に思わないのはコルビュジエ効果なのだろうか。

朝食後、屋上へ上がってみた。写真でいつも見ていた巨大排気筒や独特な屋根形状のホール、ペントハウスがあって、屋上に様々な施設が配置され活用されていた。広々としていて運動もできそう。屋上から非常階段を降りて、全てのフロアを覗いて見た。メゾネットの生活空間で人々が普通に暮らしている



▲吹抜けのレストラン

スペース部分が圧倒的に多いが、鍵がかかって保育園など特別な用途に利用されているところもあつ



▲ブリーズ・ソレイユ

た。全体的に極めて健全に維持管理されていた。

1階ホールから外に出て、グルリと建物周りを一周すると、改めてユニテ・ダビタシオンの4ha程ある

うかという敷地のゆとりと広さを実感。たくさんの緑も配置されたこのロケーションも建物を引き立てていた。

各部屋のバルコニー側の境界壁にも赤・黄・青・緑の原色の色づけがされていて、他には無い斬新さを感じさせる。これは打ち放しの出来が悪かったため、色を塗ることにしたという経緯も面白い。ブリーズ・ソレイユとコルビュジエが呼ぶバルコニーには



▲バルコニーのベンチ

モザイクタイルを仕上にはめ込んだベンチもあり、なかなか施工も手間がかかったことだろう。

有名でシンプルなピロティは、大きな塊を空中に持ち上げたよう

な印象を受けるが、この丸みを帯びた太い足の中は配管スペースになっている。普通は駐車場などに利用されるところだ。



▲ピロティ

### 3.3 ストライキで大ピンチ

1月31日は年金改革に関する大規模なストライキがあるので予定のTGVがキャンセルされた、というメールが届き、一瞬どうやってパリへ帰るのかと混乱した。TGVは動かないため万事休す、エールフランスでパリへ帰る決意をした。ネットで帰りの飛行機を手配。直前だったので航空券が6万円と、足元を見られているような思いだった。TGVの乗車券分は払い戻される手続きをパリ・リヨン駅でし

たのに、日本に帰って申請してもストの場合の返金システムが整っておらず、返ってこなかった。

## 4 その他の観光



▲カシの波止場

マルセイユはストライキの影響で中心部が閉鎖されていて市内観光はできなかった。そのためプロヴァンスに住む人が最も好きな東隣の港町“カシ”を訪ねた。カシの波止場は、ヨットやクルーザーが300隻程停泊しており、季節柄出港していない。地元の人や観光客がカフェで日光浴をし、リゾート気分が漂っていた。



▲ノートルダム大聖堂

市内に戻りマルセイユのシンボル、ノートルダム大聖堂を訪ねブイヤベースを食べることにした。そして、空港まで送ってもらうとパリへと



▲CMA CGMタワー

確実に帰ることができる。それが一番大事。マルセイユ市内の建築物も案内してもらった。ウォーターフロントではこの町で一番の高さを誇り、スカートの裾を広げたような、ザバ

ハディッド設計のCMA CGMタワーなどを訪ねた。

パリに帰り最終日はモンサンミッシェル日帰りツアーに参加。シーズンオフのためツアーも見つからず一時はもう無理かと思ったが、やっと国籍なしの呉越同舟ツアーを見つけ念願のモンサンミッシェルも訪ねることが出来た。

今回のフランスへの旅は、これまで訪ねたかったコルビュジエ作品を自分の目で見て確認でき、名建築を訪ねる旅の集大成だった。建築を学んできた中で机上のものと思っていたことが、実物を見て身が震える程のインパクトを受けた。「もっと若い時期にこの地を訪ねていたらなあ」と後悔するのだが、それでも自分のやりたかったことを達成できた旅だった。

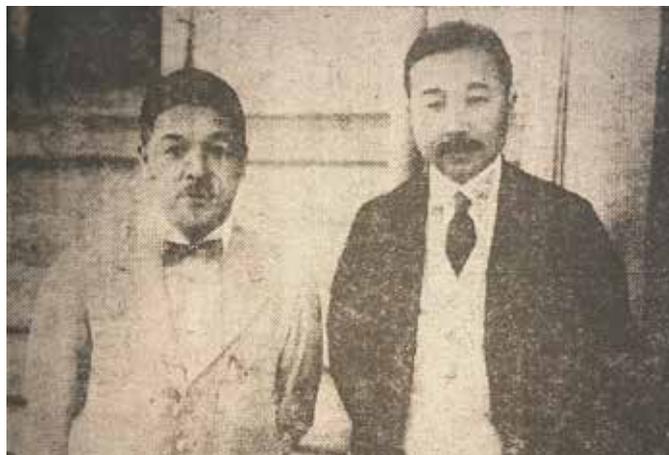
## 第2回 ヘリテージ建築を語る (建築市民講座に参加して)

松山支部 中尾 忍



▲進行の笹木篤氏(左)と倉方俊輔氏(右) (撮影中尾)

(公社)日本建築家協会四国支部愛媛地域会主催で、7/1(土)に建築史家の倉方俊輔氏をお招きし、第2回ヘリテージ建築を語る「内藤多仲と木子七郎」という建築市民講座が開催されました。(写真)昨年、萬翠荘が100周年、今年は木子氏が校舎を設計した松山大学が100周年(校舎は1年遅れで完成。来年が100周年:現存せず)ですが、前回少し書いた通り、若い建築関係の皆様にも県内の歴史的・文化的価値を保有する建築や歴史、建築技術者に興味を持って頂き、持続的なまちづくりや建築技術者の育成が地域で継続的に出来るように、建築について関心を持ってもらうための建築市民講座の開催になります。



▲内藤多仲氏(40歳)と木子七郎氏(42歳) (1927年 愛媛県立図書館所蔵)

今回は愛媛県庁本館(1929年竣工)を木子氏と共同で設計した構造家の内藤多仲氏と木子七郎氏(写真)につ

いて、建築史がご専門の倉方俊輔氏(大阪公立大学教授)に県庁の見所や内藤多仲氏について、スライド資料をご準備して頂きました。参加した市民の皆様や建築関係の皆様にはわかりやすく、内藤多仲氏と木子七郎の関係や「耐震構造の父」と呼ばれた内藤氏の日本の建築史の中の功績や構造設計のヒントになった有名な鞆のエピソード、写真等を見せて頂きました。短い時間でしたが、参加者の皆様に内藤多仲という歴史的にも重要な構造家が県庁本館の設計に関りがあり、県庁以外にも東京タワーや明治生命館、早稲田大学大隈記念講堂等、有名な建築物等の構造設計を担当していたことなどをご紹介して頂きました。倉方氏も内藤氏が長く教鞭をとっていた早稲田大学ご出身ということで、写真等のスライドを丁寧にご紹介して下さいました。

木子氏は内藤多仲氏の自邸(1926年竣工 現在は内藤多中記念館として現存)も建築家の今井兼次氏と共に共同で設計していることをご紹介いただきました。東京大学時代からの同級生であった内藤氏との共同作品が現役で存在し、使い続けられていることは愛媛の建築史の中でも特筆すべきことであり、市民の皆様にも誇りを感じて頂けることなのではないかと思っています。

倉方氏の講演の後、進行役の笹木篤氏による大正モダンと呼ばれる時代の建築様式について、短めのレクチャーがあった後、倉方氏と笹木氏によるパネルディスカッションが催されました。参加された市民の方や建築関係の方(この日は徳島からも、倉方さんと交流のある建築士の皆様の参加者もありました)からも質問や愛媛でまだよく知られていない今治ラヂウム温泉等の現状についても、今治市より参加された大野順作氏からご紹介がありました。倉方氏も今治ラヂウム温泉には視察に来られたことがあり、愛媛の戦前の建築史について笹木氏や参加者の皆様と意見を交わす貴重な機会となりました。偶然ですが、倉方氏の奥様が松山出身ということを知り、倉方氏の存在を身近に感じる事ができた講演会でもありました。また別の機会に講演会等、お願いできたらと思っています。

今回の講演会の当日の朝、会場を予定していた坂の上の雲ミュージアムより、大雨の被害で施設が使用できなくなったとの連絡があり、急遽近くの番町公民館に会場変更がありました。参加者・関係者の皆様にはご不便をお掛けしたことをこの場をお借りしてお詫び申し上げます。次回の建築市民講座(11月4日開催予定)後に第3回目の報告をさせて頂く予定です。

# 開かれた登録有形文化財建物 まちの縁側「ミュゼ灘屋」

文化財・まちづくり委員会 委員 中山 百合子



なだまち

伊予市灘町にある登録有形文化財建物：宮内小三郎家住宅＝通称ミュゼ灘屋を訪ねたその日、灘屋の一室は翌日からの「Usaatoうさと」の洋服展示販売イベントの準備で忙しそうでした。



▲イベント会場の様子

ミュゼ灘屋は、そろばん教室や日本舞踊の稽古、ピアノの練習などの学びの場として、あるいは洋服や小物販売や占いといったイベント会場として、そして定期的な映画上映会や音楽演奏の会場や講演会の場所として、多くの人に親しまれています。賃貸スペースとしての稼働率は7割8割ということで、その収入は建物の保全に使われています。



▲イベントの案内



▲映画上映会、音楽演奏など

さて、その宮内家は、灘町の歴史と共にある家です。1636年に上灘村の宮内久右衛門・清兵衛兄弟が米湊村の海辺の松林を開拓し、そこに次々と人が移り住み町並みができました。藩主・加藤泰興は大いに喜び、町名を灘町とし、宮内家は屋号・灘屋を許されたというのがその始まりです。宮内家は町年寄りをつとめ、灘屋は、酒造を営み、大洲和紙の貿易や販売を公認され、幕府役人の宿ともなっていました。現在、通りに面して建つ建物(主屋)は、1738年に建てられたものです。屋根には、象徴的な破風と鬼瓦があります。家紋の入った瓦、うだつ、虫籠窓や出格子などが特徴となっています。



▲通りからの様子

宮内家住宅を守るためには長い年月と多くの人の情熱がありました。一つの古い建物を守ることで街全体が活性化する、ミュゼ灘屋はその好例ではないでしょうか。

実際、ミュゼ灘屋が出来たことで、伊予市灘町は変わりました。市がその隣にポケットパークという小規模広場を整備し、ときにはここで誰もが気軽に楽しめる音楽イベントが開催されるようになりました。管理人の門田氏によると、ミュゼ灘屋には、近所の人が花を届けに来てくれるようになり、家にあるものを、例えば「この座卓、使ってもらえませんか?」「この屏風はどうでしょう」と声を掛けてくれるようになり、人と人との出会いやつながりが増えたと感じることが多くなったそうです。



▲ポケットパークの様子



近年、建物の改修だけでなく、その後の活用について議論されることが多くなりました。気になるかたがいらっしやいましたら、ぜひミュゼ灘屋をお訪ねください。

# 文化財・まちづくり委員会 防災イベント

文化財・まちづくり委員会 防災部会長 西浦 郁子

開催日：令和5年8月26日(土)  
場 所：建築士会館会議室  
参加者：10組の親子 計19名  
講 師：小國恵子氏 (女性防災士)

毎日のように防災訓練や講習会が色々なところで催されている昨今です。夏休みの子供さんをターゲットに「あらかじめ家族と話し合っていますか?！」をテーマに、私達建築士は建築士らしい内容を意識して開催しました。講師は女性防災士として活躍されている小國恵子さん。体験コーナーでは、日本公衆電話会の協力をいただきました。

## 勉強会内容

### 1. 講師によるプレゼン

- ・非常持ち出し袋に入れるグッズカードを子供さんが選ぶ
- ・その間に自分の部屋を親御さんにより図面化
- ・部屋の危険を認識していただく



- ・防災リュックの重さは体重の2割程度をふまえ 内容確認

**非常用リュックのポイント**

必要最低限とし、後から取りに絡る

重さは、**体重の2割** 成人：女性 8kg 男性 10kg

自分の体力にあった重さと大きさ

両手が空く 背負えるもの リュック型

肩ひもは、幅広いベルトタイプ (チェストベルト、ヒップハーネスがあればさらに良い)

目立つ色、**蛍光テープ**・**蓄光テープ**活用

避難の基本は「歩き」

置き場所：分散備蓄 (物置き、車中、玄関、2階...)  
すぐに持ち出せる! 外から取り出せる!  
定期的に点検

- ・地震発生時にとる行動
- ・マイタイムラインアプリの活用



- ・登下校中の地震遭遇の心得、ルート確認
- ・日頃から家族でしっかり話し合っておこう
- ・地震時のトイレの使用について
- ・紙で作るグッズの紹介

### 2. 小休止 おやつを作る



### 3. 災害伝言ダイヤル171の体験



▲ 伝言ダイヤルに挑戦

部屋の危険を考えてもらったり、登下校中の危険な場所や建築物を確認・意識してもらうことで、建築士が手掛けた勉強会が少しはできたのかなと思います。現実的には外歩きをして危険を学ぶと、より実感していただけたかなと考えます。災害は一人の時に来るかもしれない。今回の勉強会を機会に、どんな災害がきても家族全員が無事に乗り越えられるように、しっかり話し合っていただけたらと思います。

# 防災イベントに参加して

8月26日、文化財・まちづくり委員会主催の防災イベントに参加しました。

恥ずかしながら、私はこれまで防災について他人事のように考えていました。私の住んでいる地域は大丈夫、停電になっても数分だろうし水が止まることなんて無い、と勝手に決め込んで生活していました。そのような考えで生活していたので、ニュース等で地震の悲惨な被災状況を目にしても、防災対策はほとんどしていませんでした。

今回、防災イベントに参加して、参加者の皆さんの防災に対する意識の高さに触れ、私も防災について真剣に考えることができました。

講師である「女性と防災の会」の小國先生が、身近ですぐに取り掛かれる防災対策について説明してくださりました。

## 「寝室の安全を高める」

- ・出入口の内側、外側には倒れる、移動する、落ちてくるものは置かない
- ・廊下に物は置かない
- ・背の高いタンスは固定する

「防災リュックを作ろう」

「日頃から家族でしっかり話し合っておこう」

どれもすぐに取り掛かれる事ばかりですが、私はどれも出来ていませんでした。



▲小國先生の説明を聞く様子

説明の後の小休止の時間には、「災害時でもおいしく食べたい」ということで、じゃがりこを使ったポテトサラダ、お麩を使った和風のデザート、あずきの缶詰を使ったぜんざいの作り方を教えていただきました。今回はお子さんと一緒に参加できるイベントでしたので、小さい

文化財・まちづくり委員会 委員 大西 千里

お子さんでもおやつをきっかけに防災に触れることができるのだと感じました。

じゃがりこポテトサラダは災害時だけでなく、普段から食べたくなるぐらい美味しかったです。



▲親子でおやつ作り

最後は「災害用伝言ダイヤル171」についての説明と体験でした。

「災害用伝言ダイヤル」…存在すら知りませんでした。本当に無知でお恥ずかしい。

大きな災害時はそのエリアでは電話が繋がりにくくなります。家族との連絡手段「171」。必要な時に番号が思い出せるように普段から意識し、家族と話しておく事の重要性を改めて感じました。



▲災害伝言ダイヤル「171」を体験する様子

防災対策は「もしもの時」に自分や家族の為に必要な事。今すぐにできることばかりなので、すぐに取り掛かろうと思います。平穏な日々を過ごしていると、防災意識が薄れ、対策もないがしろになってしまいます。年に一度は防災について考える日を設けようと思います。

# 第32回全国女性建築士連絡協議会 in 金沢

## 「守り・育て・受け継がれる技術、手仕事」 ～伝統工芸と建築～

開催日：令和5年7月29～30日  
会 場：金沢市文化ホール（石川県）  
参加者：現地参加4人、ZOOM参加2人

女性委員会 委員長 下元 美恵

真夏日が続く7月29日（土）～30日（日）、石川県金沢市で行われた全国女性建築士連絡協議会に参加してきました。今回の参加者は現地参加4人、ZOOM2人、合計6人での参加となりました。



▲講演開始前に集合写真

基調講演は、石川らしい文化でおもてなし北陸新幹線金沢駅舎は伝統工芸による「美術館のような金沢駅」、講師は金沢学院大学名誉教授・大場吉美氏でした。

宿泊先が金沢駅構内だったこともあり、とても興味深いお話でした。最初に訪れた時には恥ずかしながら気が付かなかった工芸品が、講演を聞いた後は駅構内のいたるところに貴重な作品がある事に、改めて感動致しました。

2日目は6つの分科会が開かれ、その中で私達はE分科会「徳島型気候風土適応住宅」基準策定への取り組みへ参加してきました。

省エネ法が改正されていく中、「いろいろな選択肢を残していくことが大事」という言葉にうんうん。。とうなずきながら、バイタリティーあふれる島田さんの言葉に元気を頂きました。

初めての金沢。移動時間は長時間でしたが、一緒に参加して下さった女性会員の皆さんと、ゆっくりお話が出来た貴重な時間でした。また、空き時間には憧れの谷口吉郎・吉生記念館にも足を運ぶことが出来、非常に実りある全建女の旅でした。

来年は東京での開催です。皆さんのご参加お待ちしております。

全国女性建築士連合会 金沢大会に参加して

松山支部 永井 由起

7月29日、30日、金沢にて全国女性建築士会連合会（全建女）が開催された。四国から本州の日本海側の地域に行く機会はなかなか無く、数年前の金沢での全国大会に参加できなかったわたしとしてはとても有り難い機会だった。

連絡協議会の被災地報告では、東北各県の女性委員さんが協力し、ようやく全線開通した三陸復興道路を北から南までドライブレコーダーで撮影した映像を用いた報告があった。復興道路が開通したことは喜ばしいが、巨大な堤防が築かれ、景観は以前のままとはならない現状は、厳しいものを感じた。

基調講演は「美術館のような金沢駅」と題して、金沢学院大学名誉教授の大場吉美先生による、北陸新幹線金沢駅舎の待合室に石川県の伝統工芸を展示する取り組みの紹介であった。翌朝早く起きたので、新幹線ホームの入場券を買って実際に待合室を見てきた。直径160ミリの円の中に各工芸品がうまくはまっています美しく、中でも個人的には「太鼓」が面白かった。新幹線を利用される方は是非チェックしてほしい。

2日目はE分科会に出席、「徳島型気候風土適応住宅」基準策定の取り組みを伺った。



▲スライドを見るまなざしは真剣そのもの

UIFA JAPON（国際女性建築家会議日本支部）の「自然災害に備えて 住まいづくりの勘どころ」の冊子を紹介された方は、全建女高知大会の懇親会で同じテーブルの方だった。懐かしいお話をしたり、冊子の編纂には大学の先輩が何人も関わられていて、一緒にお写真を撮ったりすることが出来た。2年後は山形での開催とのことで、以前お世話になった大工さんの私塾に参加されていた方と名刺交換。初対面だけど共通の話題もあり、有意義な時間を過ごせた。

自由時間に谷口吉郎・吉生記念金沢建築館へ。企画展は「AKIRA」などのアニメーションの背景で描かれた都市の展示。建築として美術館を見に行っただけで、企



▲休憩の間に1枚パシャリ

画展のデジタルではない時代のセル画に描かれた当時の都市空間の迫りに圧倒された。常設展示されている迎賓館赤坂離宮 和風別館「游心亭」の広間と茶室を忠実に再現した空間は、ずっとここで過ごせそうな、とても贅沢で落ち着いた空間だった。鈴木大拙館、金沢21世紀美術館も見学。石川県立図書館では、各所に配置された自習室や調べ物コーナーは、空きがないほど利用されていた。たくさんの名作チェア、ソファが点在しており、上階では外を見ながら読書ができるという素晴らしい空間で、愛媛県にもこういう図書館があれば毎日でも行くのに…、と羨まずにはいられなかった。長町武家屋敷跡周辺、兼六園、成巽閣は加賀100万石の歴史の深さを感じた。

一緒に参加した愛媛県建築士会の皆さんともたくさんのお話し、とてもありがたい時間を頂いた。



▲世界で最も美しい駅の一つ、金沢駅の鼓門前で

宇和島支部 田中 陽子

私にとって初めて訪問する金沢でしたが、金沢は見どころがぎゅっと詰まった「建築の街」という印象です。



▲美しいポスターに期待が高まります

3日間の旅程の割にあちこち建物探訪しましたから、この場であれこれお伝えしたいのですが、ページのスペースも限られていますので、私の一番をご紹介出来ればと思います。今回の旅での一番は『石川県立図書館』です！



▲まさに圧巻。呼吸を忘れて見惚れてしまうほど

開架図書スペースは、円形の平面に同心円上に本棚が配置され、中心に立つとそこに並んだ本たちに見つめられている感覚になります。あちらの本からも、こちらの本からも、読んで欲しいとせがんでくるのです。表紙からの圧がすごいのです。本の魅力を見せる工夫がうまい。一冊一冊手に取りたくって、本は読みたいわ、建物もじっくり見たいわで、時間が全く足りません。人を惹きつけて逃がさない、そんな素晴らしい空間でした。

また、今回の全建女では見学だけでなく、基調講演の大場吉美さんの「美術館のような金沢駅」について、コンセプトを持つことで、こんなに人が集まる街になるんだあと実感出来ました。

今回一緒させて頂きました、下元さん、永井さん、矢野さん、お付き合い頂いて感謝致します。最後に、出発の日の朝、寝坊してハラハラさせてごめんなさい。全建女また行きたいです！

# 異業種勉強会

## ～みんなで防災グッズをつくろう～ 企画から開催まで

開催日：令和5年9月23日(土) 10:00～12:00

場 所：愛媛県建築士会会議室

参加者：11名(大人7名、子供4名)

女性委員会 副委員長 入船 安紀

愛媛県建築士会女性委員にて毎年行われている異業種勉強会を企画しました。異業種ということで防災をテーマに、昨年は松山市保健所の5階にある松山市防災センターで消防職員の方のセミナーを受講し、ビデオ鑑賞・煙体験・消火器体験・起震車試乗体験と、貴重な体験をしてきました。今年は1923年9月1日発生した関東大震災から100年という事もあり、また毎年9月1日が防災の日という事で開催する日程も近い事から、今年も防災をテーマに勉強会を開くことに決めました。



▲防災バック



▲防災グッズの確認

防災といっても幅広く奥深いので、勉強するにもどの範囲でしようかと担当の人達と一緒に色々考えました。専門の方を招いて実施するよりも、自分達で防災について学んだものを皆さんにも知ってもらおうという話にまとまり、身近なところで防災グッズと非常食について考えてみることにしました。堅苦しいものにせず、子供も楽しめるように、すぐに手に入るものでランタンづくり、防災について子供でも分かるように防災なぞときかるた遊び、そして防災グッズを見直す為に、防災バックの確認と非常食を実際に食べてみる企画を提案しました。

当日は、大人7名、子供4名の参加がありました。まず始めに、防災なぞときかるたで読み手と取り手に分かれて楽しみました。お子さんが喜んで参加しているのを見てとても微笑ましく、私もあたたかい気持ちになりました。ランタンづくりでは、懐中電灯だと直接目にきて眩しいので、ビニール袋をかぶせることで光が和らいであたたかな色合いになり、それをトイレトペーパーの芯に懐中電灯を立てて自立させたり、紙コップの中に入れるなど、あるものを使って簡単に作れる簡易ランタンの作り方を学びました。また、楽しめるようにペットボトルを使って装飾品を貼り付けた可愛らしく素敵なランタンも作ってみました。個性にあふれたアイデア満載の素敵なランタンが出来上がりました。

私の家にも防災セットを置いていましたが、使うこともなく押し入れの中に入れていたままで月日が経ち、どこにあるかも忘れていました。この勉強会をきっかけにその防災セットを探して開けてみたら、5年の賞味期限が



▲アイデア満載のランタンができました

あるはずの非常食が賞味期限切れだったので。そのことに危機感を覚えました。そして新たに防災バックと非常食を購入し、今回の勉強会に活用しました。非常食もおにぎりやピラフ・パンと色々あり、味も食べやすく美味しかったです。このように普段から非常食を食し、味見をしておくのも大事なのかなと思いました。防災バック内には30種類もの防災用品が入っていました。今回は使用方法については学びませんでした。普段使わないものもあったので、今後使用してみて、いざという時には使い方も分かっておくことも必要なと思います。

今後も防災について学び、正確な知識と経験を積んでいきたいと思います。今回参加していただいた方、準備していただいた方、皆さん有意義な勉強会になりました。ありがとうございました。



◀防災なぞときかるたで防災の勉強



## 異業種勉強会に参加して

女性委員会委員 岩本 さやか

小学1年生の娘と参加させていただきました。防災なぞときかるたは子供向けですが、百人一首のように上の句と下の句でできています。覚えることでかるたもたくさん取れるし、みんなで楽しみながら自然に防災の知識もつけられるなと感じました。娘もたくさんかるたが取れて嬉しそうでした。次は本気で勝負してみたいです。

ランタンづくりでは、ペットボトルにおはじきやシールを好きなように貼っていきました。娘はもちろん、私



▲防災なぞときかるたに挑戦

も夢中になって作りました。ペットボトルとは思えないような素敵なランタンに仕上がりました。避難生活時や停電などで不安なとき、このようなランタンがあれば、気持ちが安らぐだろうなと感じました。

防災についてみんなで考えようの時間では、巨大地震のシミュレーションの映像を観ました。大きな音や雰囲気には娘は怖がってあまり直視できなかつたようです。大変なことが起こっていると感じとってくれたようです。

防災食の試食では鮭おにぎりを作りました。お湯を線までいれて20回ふったら出来上がります。簡単な手順ですが初めてだと合っているのかな?と少し不安でした。

用意している防災食も一度は試してみることも必要だなと思いました。出来上がりはちゃんとした形のおにぎり、味も鮭の塩気がありとても美味しかったです。パンも防災食なのにふわふわでしっとりしていてとても美味しく食べられました。防災バックの準備と点検も大切なことだと学びました。娘も帰宅するとすぐに『これがあるあれがある』と自分なりの防災バックを用意してくれました。実際に見たり試したりすることで、防災意識が高まりとても良い経験になりました。子供にとってもかるとやランタンづくりを楽しみながら、防災について知識を学んでくれてとても良かったです。



▲ランタンと一緒に記念撮影

## 一級建築士設計製図試験対策勉強会

青年委員会 委員長 和田 崇

開催日：令和5年9月2日(土)  
開催場所：IYO夢みらい館(図書館)伊予市  
参加者：5名+スタッフ7名

9/2(土)青年委員会主催による一級建築士設計製図試験対策勉強会を開催しました。前任の松平青年委員長時代から始まった試験対策の実例見学会。自分が受験生だったころは図面を描きながらも、その内容を具体的にイメージ出来ていたのかどうか。実際の建物を見ながら建築士である士会会員が解説をすることで受験生に自分の描いている線、言葉の意味を再認識してもらうということが目的です。

今年度の課題は「図書館」。シンプルですが、単体の図書館なのか、複合施設なのか、バリアフリー、省エネルギー、二酸化炭素排出量削減、セキュリティ等への配慮…などなど受験者の方にとっては難しい課題ではないかと思えます。

講師は今年度も近藤岳志さんに引き受けてもらいました。会場は伊予市のIYO夢みらい館様にご協力いた

き、複合施設の中の図書館を見学させてもらいました。会場や日程の都合もあり参加者は5名+士会スタッフ7名と小ぢんまりとした会になりましたが、近藤さんの解説を聞いた住宅センター井上さんは自分たちが聞いても勉強になるなあ!と言われており、本当にその通りだと思います。

見学会の内容を踏まえて、試験直前には近藤さんによるYouTube動画の公開も予定しています。過去の動画を見た方からはとても参考になり、無事試験に合格することが出来たというコメントもあり、活動の成果が少しずつですが出ているように感じます。

今後この活動を継続していくとすると、実例見学会当日の解説や動画作成など、近藤さんにお任せしていることが多いため、青年委員会全体でもう少し負担を分散出来るような方法が必要だと思います。そのあたりの引き継ぎ方も青年委員の任期内に考えて行きたいです。

勉強会に参加いただいた方や動画を見た方が試験に無事合格し、建築の世界でますます活躍されることを祈念いたします。近藤さんはじめ、スタッフとしてご協力いただいた皆様、ありがとうございました!

# 建築士の日の行事 ～いまばり建築巡礼2023～

今治支部 越智 弥生

開催日：令和5年7月29日(土)  
開催場所：今治市民会館・公会堂・市庁舎  
及び愛媛信用金庫今治支店  
参加者：今治市内の子供5名(中学生4名+小学生1名)、  
保護者4名、スタッフ16名

今治支部の建築士の日の行事として「いまばり建築巡礼2023」を開催しました。今治市内の中学生を対象としたイベントで、今治市の名誉市民であり世界的建築家・丹下健三の今治の建築作品をめぐり、若い世代にもっと興味を深めてもらおうと開催しました。

はじめに市民会館にて、今治支部の大野さんより、丹下健三の今治での建築や代表作品の、設計意図や構造についてのセミナーを行いました。セミナー後の休憩時間には、会場に展示した模型や、当時の設計図や資料、写真パネルを見ながら、スタッフに質問したり、説明を受けたりしながら、過ごしていただきました。普段見られない貴重な資料に、スタッフも興味深々でした。



▲大野さんによるセミナーの様子



▲休憩時間の様子

この日は、建築めぐり日和の快晴で、建物は映えますが、とにかく暑かったので、参加者の皆さんには、帽子とタオルと飲み物を各自準備してきていただきました。出発前には、熱中症対策ゼリーもお配りし、万全の態勢を整え、いざ建築めぐりへ！ 当たり前ですが、外へ出ると、市民会館・公会堂・市庁舎の3棟がすぐ目の前にあるというとても恵まれた環境で、先ほどのセミナーで聞いた、特徴的な外観や、3棟と広場（現在は駐車場）が都市の中心として道路とつながりをもたせた市民に開かれた設計がされていることを、実物を見ながら、わかりやすく体験していただけたのではないかと思います。

市民会館の  
大きな庇の  
下で解説中。

奥には、  
市庁舎が  
見えます。



公会堂では、1400席を確保する大スパンを実現させた屋根・壁の折板構造を見学しました。普段経験できない舞台上にも上がらせていただき、舞台袖の目に触れないところでは、仕上げられていない打放しのままの折板構造の壁を確認することもできました。



▲客席からの様子



▲舞台袖からの様子

市庁舎では、市議会の傍聴席を見学しました。南と東からの安定した光をとりこむ構造デザインで、席に座り前を向くと、両サイドからやわらかな光が入る明るい空間を体感することができました。



▲傍聴席からの様子

▲光を取りこむ  
構造デザイン

愛媛信用金庫今治支店では、会議室と屋上を見学しました。街の中に浮かぶ船のような形の屋上からは今治市内が一望できる、とても開放的な空間でした。



▲浮かぶ船のような外観



▲屋上への移動の様子

今回、イベントの参加人数は、想定していたよりも少なかったのですが、皆さん真剣にお話を聞きながら、じっくりしっかり建物を見学し理解を深めていただけたようで、よかったです。参加いただいた方は、もともと建築に興味がある方が多かったようなので、これからのつながる機会になったのではないかと思います。

実は、私自身も、こんなにじっくり見学したことがなかったもので、一緒になって建築めぐりを楽しませていただきました。開催前の下準備のための勉強会へ参加したり、貴重な図面を見せていただいたり、普段入れない場所へ入らせていただいたり、ありがとうございました。

# 松山支部研修旅行 研修バスツアー in 丸亀

松山支部長 花岡 直樹

開催日：令和5年9月17日(日)

場 所：丸亀城、中津万象園、四国水族館

参加者：松山支部会員及びご家族25名

9月17日に、本当に久しぶりに支部の研修旅行を開催しました。晴天に恵まれ(ちょっと暑すぎた!)丸亀城、中津万象園、四国水族館を巡りました。ご家族やお子ちゃまも合わせて25名の参加を得て、楽しく懇親を深めながら研修をすることができました。ウェブではなく「対面」が大事と、改めて思った一日でした。

以下、参加された会員に感想をいただきました。



▲丸亀城 集合写真

松山支部 松平 定真

先日、支部の研修旅行で、丸亀市周辺を巡るツアーに参加しました。

午前中に、丸亀城を見学しました。花岡支部長が用意してくれた資料とともに解説付きで、現存する数少ない天守のひとつとして、また変わった構造など、地元ガイドさんに負けないくらいの説明を受けながら、見学することができました。

昼食を中津万象園でいただき(アルコール付きは、数人だけでした。みなさん真面目です)、庭園を散策し、思ったより広い敷地を汗だくになりながら、楽しむことができました。



▲昼食



▲四国水族館

その後、四国水族館に移動し、かなり久しぶりの水族

館ということで楽しみにしていましたが、3連休の中日ということもあり、人が多すぎて、海の生き物を見る余裕が僕にはありませんでした。(笑)

水族館の周りもいろいろキレイになっていて、ゴールドタワーを含め、すっきりした街並みになっていました。今回、久しぶりの支部旅行の開催ということで、花岡支部長や活性化委員長の大塚さんの企画等、お忙しい中進めて頂き、ありがとうございました。

また、来年もよろしく願いいたします。

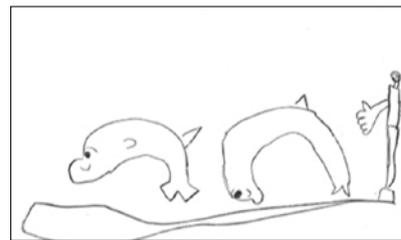
松山支部 生熊 有子

コロナ禍もあり、かなり久しぶりに土会の研修旅行に参加させて頂きました。個人的にはまだコロナ警戒中ですが、少し前に5歳の息子とコロナになってしまったので、免疫ができたはず……という事で、安心して参加できました。

当日は、秋というのに、かき氷が食べたくなるほどの暑さでした。最初の丸亀城は、日本の現存天守12城の1つで、層塔型で3重3階のお城でした。

2ヶ所目の中津万象園は、昼食が終わった人から散策するという見学スタイルでした。食べるのが遅くなり、赤い太鼓橋(邀月橋)を渡って少し進んだくらいで引き返しましたが、ゆっくり散策するのに良さそうなお庭でした。

3ヶ所目は、四国水族館。私がキョロキョロしている間に、お友達を見失い少し不機嫌な息子。小規模な水族館でしたが、一度見失うとなかなか見つけられません。大きな水槽ではエイがゆったりと泳ぎ、ペンギンは、ホースからでてくる水の方が冷たいからか、陸で水浴びをしていました。イルカショーは15時から15分まで。集合時間は15時20分。その為、ちょっと早く切り上げる旨を説明してから見学。ショーが大盛り上がりの10分頃「ママ、行くよ!」といわれ、「もうちょっと〜」という私。後ろ髪をひかれる思いで、ショー途中で移動を始めました。



▲匂くんが描いたイルカショー



▲大ジャンプ!

団体行動が苦手な私より、息子の方が団体行動は得意かも。保育園効果かなあ。息子の成長を感じた良い旅行になりました。これからは、もっと頼れる相棒として育てていくぞ!

# 建築士の日の行事

## 宇和町お庄屋 長屋門 見学会

西予支部長 井関 克徳

開催日時：令和5年7月29日（土）

見学会：13：30～16：30

懇親反省会：17：00～18：15

参加者内訳：会員：7名（内 準会員：1名）

一般：8名（内 小学生：3名）

ガイド：1名（岡崎氏）

西予支部の支部長の井関克徳です。令和4年度では新型コロナウイルス感染症の会員内の蔓延で建築士の事業が実施できず、支部理事会で今年は頑張って実施しようという議論の結果、①市民を巻き込んだ事業②建築に関する事③地域の特徴が出る事業などを基本に「宇和町お庄屋長屋門見学会」と決まりました。



▲見学前に概要を説明していただく岡崎様

事業にあたり、事務局の渡辺さんと西予市の文化財の保護に詳しい西予市文化財保護審議会の委員長の岡崎様に相談することとしました。

宇和島藩政時代の米処の宇和盆地には20余りのお庄屋が有り小さな町ながら全国有数の戸数とのことです。

まず庄屋さんの家は生活の場でプライバシーの問題もあるので長屋門の見学となりました。米などの年貢を集めて藩に納める役目以外に、庄屋の管理区域内の治安も独自に裁判官のような特権も与えられていたと聞き驚きでした。7月の暑い日中の見学会なので午後の4時間余りで見学できる件数を4件と決め、事前に庄屋さん宅にお願いに行き、全戸快くご了承いただきました。



▲宇和町上松葉 本多分家長屋門にて

当主のご好意により庭廻りまで見学をさせていただきました。建物は小高い位置にあり、田畑莊園が一望に見渡すことができ、また大きな銀杏の木があり、葉が黄色くなると稲刈りの準備の合図となるようになっていたとのことでした。



▲宇和町稲生 大塚家庄屋長屋門にて1



▲宇和町稲生 大塚家庄屋長屋門にて2



▲旧大塚家庄屋長屋門 阿吽の一對の竜の飾り箱棟



▲本多家本家 長屋門



▲宇和町稲生 旧大塚家内部見学

旧大塚家で長屋門の内部を見学させていただきました。  
家主様にはご丁寧に説明もして頂きました。



▲宇和町明石 伊藤家宅にて

伊藤家でもご好意により住宅内を見学させて頂きました。  
驚くほど広い土間の台所や座敷を見せていただき、  
小学生たちは驚いていました。



▲反省会懇親会の様子

全体を回り終了後反省会と懇親会を行いました。

一人一人参加した感想を以下のように頂きました。

- ①参加を勧められて始めは暑いし嫌だなあと感じてたけど、参加して良かった。
- ②藩政時は藩の許可が無くては長屋門を建築出来な事を初めて知った。明治以降は財力が許す限り自由に建築出来るようになったことを初めて知った。
- ③藩政当時と制度が違うので、長屋門や居宅の維持管理が大変だという当主様の説明で、大規模な建物を自費で管理しなくてはならないので大変だと思った。
- ④まだ沢山の庄屋さんの建物が有るので引き続き来年以降も見学が出来たらいいと思う。

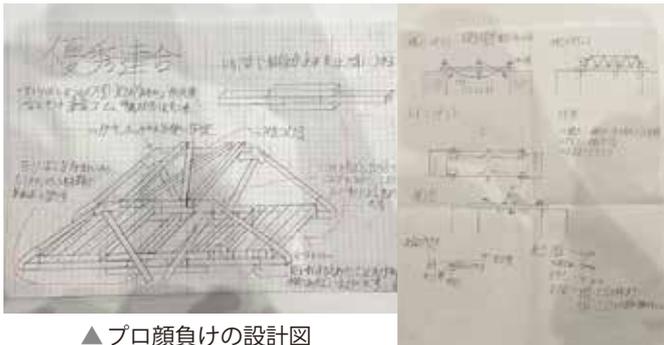
支部長としての感想は、やはり建築士と市民と一緒に事業をする事ができ、良い事業になったのではと思いました。参加した小学生は将来建築士かな！？是非そう  
なって欲しいものです。

# 建築士の日の行事 目指せ建築士!安全な橋をつくろう。

宇和島支部 青年部 中尾 英治

開催日：令和5年8月24日(木)  
開催場所：宇和島市学習交流センターパフィオウわじま  
多目的室  
参加者：中学生6チーム (18名)  
高校生3チーム (11名)  
スタッフ：11名

私たちは建築士の日の行事として「目指せ建築士!安全な橋をつくろう。」を開催しました。去年に続き2回目ということもあり、去年の反省も踏まえてメンバーと何回も打合せを重ねて準備してきました。今回は中学校に加えて何校かの高校にも参加を呼びかけ、たくさん参加してもらえました。36cm離れた二つの木の土台の間に、決められた画用紙や割り箸やか糸等の道具を使って作る安全な橋に、今年も生徒さんの柔軟で私達も驚くような発想が飛び出すのか期待感でいっぱいでした。



▲プロ顔負けの設計図

事前に設計図(イメージ図)を考えて、それを参考に1時間の作成時間の中、豪華賞品目指して真剣に作っていました。



設計図通り作っていくチームもあれば、設計変更を余儀なくされるチームもあり、見ている私達もあっという間の1時間でした。



制限時間内に作った橋に、去年は耐久性を測るおもりが思った以上に必要だった点をふまえて、重量を増したおもりを載せました。審査方法は橋の丈夫さはもちろん、美しさやユーモア性などでも評価しました。



▲女性建築士の卵!?

どの作品も見どころ満載で審査には苦勞しましたが、受賞された生徒さんおめでとうございます!



▲将来の建築士!?

この「目指せ建築士!安全な橋をつくろう。」を通じて、参加した生徒さんや引率の先生、保護者の方にも私達の活動を知ってもらい、建築や構造計画の楽しさを感じてもらえたと思います。そして「将来建築関係の仕事がしたい人?」の質問に手を挙げた生徒さん達と、どこかの現場などで今日の事を話せたら素敵だなと思いました。最後に今回のイベントに準備等尽力してくれましたメンバーの方々、本当にありがとうございました。

## 日常

松山支部 東 哲也

松山支部の西岡亜由美さんよりバトンを受け取りました東建設株式会社の東哲也です。建築士会に入会して、十数年経ちますが、中々活動のほうに参加することが出来ていません。これを機会にでは無いですが「活動できる時に活動し」、少しでも建築そして社会に貢献できればと思っております。

さて「けんちくの輪」はテーマが自由と言うことで、色々考えた末に、シンプルに「日常」と言うテーマで、話させていただきます。

私の家族構成は妻と長男長女、次男の5人家族で毎日賑やかに生活を送っています。毎日のルーティンは子供たちの朝食作りです。「食」の大切さは私が子供の時から親にずっと言われていましたので、それを私の子供たちにも伝えようと思って毎日のルーティンになっているのだと思います。そして朝食を食べて子供たちは、小学校に登校します。その姿を見て一日が始まります。



▲おやじが集まる会

子供が通っている小学校に、「おやじが集まる会」がありまして私もその会に今年から所属し、色々な活動をさせてもらっています。毎月1回体育館・運動場で子供たちと大人が全力で遊んだり、6月には子供たちと田植え体験、7月には地域の夕涼み大会で出店販売、子供たちと交流キャンプ大会、子供たちとマリンスポーツ体験・BBQ大会、8月には奉仕活動などなど、常に子供たちと全力で時間を共にしています。9月中旬に全国おやじサミット2023 in 瀬戸内が開催されまして、私も会に所属したばかりですが、話だけでも聞いてみたいと思いいサミットに参加させて頂きました。意見交換のテーマのひとつに「今と昔で変わったこと」と言うテーマがあり、そのなかで「今も昔も子供たちは変わってなく、大人たちが変わった」と言う意見には、ものすごく私自身考えるところがありました。サミットに参加させて頂き本

に有難うございました。

「感謝」「おやじが集まる会、最高～！」

サミットに参加し帰宅したのが24時頃で、次の日は子供のサッカーの試合ということで朝5時に起床し、いつものルーティンの朝食作りをし、子供と一緒に試合会場に向かい、子供たちは試合会場の準備を子供たちだけで行います。子供が所属しているチームはサッカーの技術・戦術と言うより、人とのコミュニケーション・思考力・行動力を大切にしているチームだと私は思っており、私どもの若いチーム(会社)スタッフにも、まずはコミュニケーション力・思考力・行動力そして判断力を意識するよう話をします。そうこうしていると試合会場の準備が整い、試合が開始し、私も昔すこしだけサッカーの経験がありましたので、審判のお手伝いをさせて頂き私自身にもいい運動となっており、子供も学校では学べないようなことを、「学」ばせて貰ってるような気がします。監督さん「感謝」。

そして次の日も、稽古に行ったり、仕事とは離れた会に参加したり、地域の方のお手伝いをしたりという日常を送っています。

私自身の日常での3本柱は「仕事」「子供」「地域」で日常を送っています。この3本柱に共通して実施している気持ちは、

- 全力で取り組む気持ち
- 全力で楽しむ気持ち
- 無駄な事は無いと言う気持ち

この3つの気持ちで、日常たくさんの人と「出会い」、色々なことを「学」ばせて貰っています。これからも宜しくお願い致します。

最後に今回「けんちくの輪」のバトンを渡して頂いた西岡さん、ありがとうございました。

今回は住宅保証機構株式会社の大内さんにバトンを受け取って貰います。「大内さん、宜しくお願い致します!!」



▲私の建築の原点

## 見える錯覚 見えない錯覚

八幡浜支部 杉山 博司

八幡浜支部の元事務局長・支部長の林一夫さん（真打林家一扇師匠）からこのお話し（おあと）をいただきました。ここ半年余りの間に自分の身に起きた小さくて痛い事件を報告します。

ここ数年前まで目の不具合を覚えたことはなかった。そんな自分が、最近、本（文字）に嫌われることが多く、手元にある本は机の上に渦高く、山とまではいかないまでも、来客があってもそれが誰なのか目の前の山（本）が邪魔をして、体を傾けながら確認しないといけないほどに思えて仕方がない。そのような状態だから、その積まれた邪魔者（本）の中味を確認して居ようはずがない。ここ最近珍しく読んだのは、そこに積まれていない市川沙央さんの「ハンチバック」くらいである。

なんのことはない。目が少し不自由になってきただけのことである。文字が読み辛いのである。1、2年前から特に右目が少しぼやけて見えだし、さらにさかのぼること4、5年前より右目視野の右上に飛蚊症の親玉のような、しかも点々と存在するだけでなく、ジブリアニメの「となりのトトロ」に出てくる「真っ黒クロスケ」の親分のような邪魔者が自分を文字から遠ざけているのである。

この目の不自由さによって、生活を脅かされるような大きな支障を感じていないにしても、いくら感度の鈍い自分とは言え、そろそろ限界を感じたのが今年の暮れであった。病院の嫌いな、特に目薬さえ点したことのない自分にとって、眼科にかかることは清水の懸造り舞台から飛び降りるに等しい思いであった。

眼科医の先生には飛蚊症の「クロスケ」はそれほど苦にならないので、右目の視野の中心部より同心円で半分ほどの範囲がピントのぼけた薄乳白の瓶の底に覆われて不自由していることを告げ、早めの処置を願った。

おかげで今年の2月のあたりに2泊3日の白内障手術体験（術前、当日、術後）となった。目の手術は初めてであったが、親切な友達やら、そうでない友達から、いかにも自分が体験したかのような怖さを無理矢理聞かせていただいた。しかし手術を受けるのは自分なのである。事前にそれなりの予備知識も備えたつもりである。

覚悟を決めた朝、手術台で麻酔薬の入った点眼液を点され、麻痺が効いたか効かないかの頃合いを見計らって右目尻から何やら針のようなものがグリグリ、グリグリと侵入してくる。事前に執刀医から「決して術中は動かないように！下手すると再手術になって取り返しの効かないことになりかねないからね!!」このような話を少しの臆面もなく、しかも抑揚のない声で言い渡されると、何か悪いことをした罰でも受けるかのような錯覚にさえ思ってしまった。

たった20分ほどの手術時間が数倍に感じたのは決して自分の臆病さのせいだけではない、と変な確信をあとでしたものである。

この手術の2週間後に左目の手術をすることになった。手術した目としない目に見え方の差異が生じるらしい。1回目の右目の時と違うのは、針のようなものが侵入してくる方向が左目尻からということだけであった。それでも怖さは変わらなかった。説明では、グリグリとして侵入してきた針は人工の新しい眼内レンズを入れるため、濁った水晶体をギュギュッと吸い出すものだったらしい。

術後、半年になろうかという今、遠視、乱視、老眼、その他もろもろ用の5、6本の眼鏡を持つ自分にとって、そのすべてが不用になってしまったことをここ数年来の幸と感じている。

「真っ黒クロスケ」もかつての勢いはなく自分の右目の右上隅に小さく邪魔にならない程度に静かに遊んでいる。ピントのぼけた薄乳白の瓶の底はどこに行ってしまったのか行方不明のままである。

今のように、見える世界が明るくはっきりとしていたのは一体いつ頃までだったのか、その記憶さえ薄くなってしまっている。ひょっとすると、この2回の手術さえも記憶から遠ざかってしまうかもしれない。見えることが当たり前で、見え辛くなって初めて、見えることだけに心を奪われてはならないという教示を受けたのかも知れない。

下手な趣味の話になって恐縮であるが、これまで見えるものだけの写真撮影に心血を注いでいた自分を、見えない何かを感じさせる撮影へ駆り立ててみたいと思うこの頃である。

このあとは八幡浜支部事務局長の安藤嘉晃さんにつながります。よろしくお願いします。



▲趣味の写真（解禁の朝／撮影地八幡浜市）



▲関地の精／撮影地西予市



▲白蓮の夜明け／撮影地高知県

## あなたの原稿をお待ちしています。

公益社団法人として、異業種や全ての皆様から建築士会の枠を超えて原稿を広く募集して広く購買して頂くようにしています。是非、寄稿して頂きますようお願い致します。本年度は年6回発行となります。(尚、営業的色彩の濃いものにつきましては、掲載されない場合もありますので、ご了承ください。)

「いしづち」の次号の原稿締切日

令和6年 1月号 (156号) 令和5年11月20日(月)

※校正印刷の関係で締切延長の最終期限は一週間後の木曜日とします。

※1ページ写真込みで2150文字(25文字×43行×横2段)のWORD様式を事務局で用意していますのでご活用ください。

写真は1ページ当たり3枚程度まで題名を付けて添付してください。

また宜しければ投稿者の写真(免許写真程度の顔写真)を添付してください。

会員の皆様のご参加をお待ちしております。また記事等についてのご意見・ご感想もお寄せください。

(尚、投稿された原稿につきましては、要旨を変えない程度の若干の訂正等を加えることがあるかもしれませんので予めご了承ください。)

この誌面を通じて、会員の方々、そして一般の方々にも、建築についての対話等の輪が広がればと願っています。

情報・広報委員会

## 読者の声欄

「いしづち」に関するご意見・ご提案などをお寄せください。お待ちしております。

「いしづち」編集委員会(士会事務局内)宛 FAX 089-948-0061

## 編集後記

建築家・三分一博志氏によって設計された自然体感展望台『六甲枝垂れ』を探訪したお話です。

そこは、兵庫県六甲山上の『六甲ガーデンテラス』という複合施設内にあります。そして、網状のドームの中に山形の煙突のようなものがドーンと空に向かって伸びるこの建物は六甲枝垂れと呼ばれる展望台でした。凍るような寒さの冬には、六甲の美しい樹氷をドームのメッシュフレームによって繊細な樹氷のように無数の氷霜に覆われる様子を見ることができます。

私が訪れた時期が9月と真夏で、樹氷を見ることはできませんでしたが、大阪・神戸を一望でき、全国に名高い景観を望むだけでなく、訪れる人が、六甲山の自然のエネルギーやその循環がもたらす変化の美しさに触れられるようにいろんな仕掛けを施していました。大樹の枝のようなドームのメッシュフレームによって周りの自然美をゆるやかに内包し、安心と心地良さを感じました。

建築家・三分一博志氏は「建築は地球の一部である」というコンセプトから、人間が自然を制するのではなく、その場所にある地形や気候を細かく分析し、太陽熱や風力、水などの自然エネルギーを循環させる建築・仕組みを作り出すという設計のあり方『エナジースケープ』を作り上げました。

この様な考え方が個人的に大好きで、自然は驚異ではなく、向き合えば地球に感謝できますし、地球人で良かったと思えます。

### 〈いしづち〉2023/11

令和5年11月発行

発行人 会長 尾藤淳一

発行所 公益社団法人 愛媛県建築士会

〒790-0002 松山市二番町四丁目1-5 愛媛県建築士会館2F

TEL(089)945-6100 FAX(089)948-0061

<http://www.ehime-shikai.com>

印刷所 アマノ印刷株式会社

情報・広報委員会・広報委員

委員長/大平 将司 副委員長/渡邊 道彦

編集委員/河合 優志 西岡 亜有美 西森 勉 花岡 晶子